慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ニュー・ヨークからアイオワへ(下) : ある農民の西部移住
Sub Title	From New York to Iowa : the experience of a westward migrant
Author	岡田, 泰男
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1974
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.67, No.8 (1974. 8) ,p.685(21)- 701(37)
JaLC DOI	10.14991/001.19740801-0021
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19740801-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」67巻8号（1974年8月）

私がこの問題について懇談したサセックス大学発展研究所（Institute of Development Studies, Sussex University）の学者たちは，日本の事例も熟知しており，アフリカ人の能力についても，日本企業の判定は悲観的であって，実際にはアフリカ人によって代替されるという見解をとっていたのは，きわめて印象的であった。このことは，事態に直面している人が悲観的となり，客観的に観察できる人が，同じ問題について楽観的となる傾向を示している。

しかし，日本の明治維新直後の状態と今日のアフリカ諸国の状態は同じではないし，技術そのものの性格も同じではなく，日本人とアフリカ人は人種的にも，歴史的にも同じではない。もちろんこの格差の判定は質的なものであって，事実上不可能である。

さらに今日，アフリカ人が，マニュアルにもとづく作業はできるが，管理や緊急事態の処理に難点があるのは，過去に行なわれた白人企業家の教育の結果であるという可能性は十分存在する。学位があれば同等の俸給を要求するという態度も，学位のないことを理由に，差別的扱いをした白人企業家の態度に対するアフリカ人側の反動的結果であるかもしれない。

日本進出企業が短期的ばかりでなく，長期的観点に立つことは必要であるが，私企業は利潤最大化・危険最小化原則に従う必然性がある。被投資国側は，その政策の実施が外国企業に対して不利な影響を及ぼすが，しかも外国資本の流入を望むならば，アフリカナイゼーション政策に伴う，外国企業に対する補償を援助として投資国側政府に要求する方法がある。ただし，投資国側の可能な援助額は無限ではない。

被投資国側はその国民化政策，本稿の場合はアフリカナイゼーション政策により，経済発展が最小費用径路から乖離する可能性を考慮し，この政策が，長期的にみてその国の経済発展になるような順序で実施する必要がある。独立国の政府は外国企業に対し，経済的にはのちに停滞という形で報復を受けるかもしれないが，少なくとも政策的には上位にあるからである。（1974年7月）

（経済学部教授）

ニュー・ヨークからアイオワへ（下）

——ある農民の西部移住——

岡　田　泰　男

はじめに
I　西部移住と農場売買
II　西部移住と農業生産
（以上『三田学会雑誌』67巻7号）
III　西部移住と農業労働
IV　西部移住と農場経営
V　結　び

III　西部移住と農業労働

ベンジャミン・ギューがアトキンズ収穫機を購入したのは1855年であったが，アメリカにおいて小麦収穫の機械化が普及しはじめたのは，まさにこの頃であった。収穫機の使用が一般化した原因としては，クリミア戦争などによる小麦価格の上昇と，その結果としての作付面積の増大，さらには労賃上昇による収穫機利用の有利さなどがあげられている。また機械化の結果として，労働時間が大いに節約され，労働生産性が上昇したことは周知のところである。(1)

小麦価格の上昇という点については，ベンジャミンの日記からもうかがい知ることができる。例えば1853年には，ベンジャミンが小麦を売却した際の価格は，ブッシェルあたり40セントから50セントであった。それが1855年になると，ブッシェル95セントとか1ドル25セントとかいう価格になり，収穫期の後で小麦価格が低いはずの10月にも1ドル40セントで売れている。しかし，作付面積については日記には記されておらず，したがって労働時間の節約という点についても，はっきりしたことは解らない。また，たとえ作付面積が解っていても，日記には何時から何時まで働いたというような記載はなく，収穫機によって何時間分の節約ができたかを正確に知ることは不可

注(1)　Leo Rogin, *The Introduction of Farm Machinery* (Berkeley, 1931). なお，同書97頁にアトキンズ収穫機の図がのっている。また，次を見よ。Paul A. David, "The Mechanization of Reaping in the Ante-Bellum Midwest," in Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman, eds. *The Reinterpretation of American Economic History* (New York, 1971), pp. 214-227.

能である。

収穫機が農業労働の生産性を上昇せしめる上で大きな役割を演じたことは疑うまでもない。とくに小麦は収穫すべき期間が限られていたので，収穫可能な面積が生産拡大の上限をなしていた。それ故，小麦生産の増大を論ずるにあたって，収穫機の採用が注目されるのは当然のことであろう。しかし，農業労働の節約をもたらすものとして，耕作方法の変化や耕地の状態といった要素も存在することは，先にふれた通りである。さらに，前節において述べた如く，ギュー農場の場合には，農業機械化それ自体が，西部移住によってもたらされた結果であった。もちろん，アイオワ時代のギュー農場に焦点を合わせ，収穫機の導入が農作業に与えた影響を見ることも可能であろうが，本稿では，あくまでも東部と西部との対照に重点をおきたい。したがって，収穫機械化の意義も，西部移住にともなう農業労働の変化の一部分として扱うことにする。

さて，ニュー・ヨーク時代とアイオワ時代を比較する場合，収穫機の影響などは極めてつかみにくい。例えば小麦収穫にかかった日数を見ると，ニュー・ヨークの1848年には3日間，アイオワの1855年には5日間となっている。前者は大鎌によるものであり，後者は収穫機によるものであるから，この数字からは，アイオワ時代における小麦生産の著しい増加を推測することしかできない。もっとも収穫後の運搬にかかった日数を見ると，ニュー・ヨークでは3日分の収穫をその日のうちに運んでしまっているのに対して，アイオワでは5日分の収穫を7日間かけて運んでいる。運搬距離の差を，一応農場内部ということで不問に付せば，収穫日数と運搬日数の比較により，アイオワにおける収穫能率の高さを知ることができる。とはいえ，この程度の発見はあまり意味がないのであり，ベンジャミンの日記を史料として利用する以上，他の種類の史料（例えば旅行者の観察や各州農業協会の報告書）からは得ることのできない知識を求めるべきであろう。この日記の長所は，年間を通じての日々の農作業を知り得ることであり，小麦なら小麦の生産に何日分の労働が必要であったかが解ることである。すなわち，年間を通じてのギュー農場での労働力の配分を知り，そうした観点から，ある作物の生産が当農場においてしめていた比重を明らかにし得ることである。農場経営の観点から，特定の生産物がしめていた比重を明らかにしたいという場合には，所得の中での割合を知れば良い。1855年のギュー農場に関していえば，販売された生産物は小麦のみであるので，小麦が100パーセントの重要性を持っていたといって良い。しかし，1855年といえども，ベンジャミン達の仕事は小麦の栽培だけではなかった。農場における1年間の労働という観点からすると，小麦の持つ比重は当然軽くなる。しかも，他の農作業や関連作業をおこなうことは，ギュー農場の存続にとって欠くことのできぬものであった。

先に，ニュー・ヨークのギュー農場について，それがいわば有機体であって，一部分だけの変化は不可能であり，結局あらゆる変化が不可能だったと書いた。アイオワに移ってからのギュー農場の場合，周囲の環境によって，変化が容易だったことは事実だが，有機体的な性質は保持していた。

自給的であろうと商業的であろうと，農場は生産の場であると共に生活の場であって，後者の面を否定してしまうことはできない。小麦生産に特殊化するといっても，ギュー農場は小麦生産工場にはなれなかった。こうした事情は，19世紀中葉においては，東部西部を問わず共通のものであったろう。収穫の機械化は，まさにこのような場でなされたのであった。それ故，収穫機導入の意義を正当に評価するためには，単にそれが収穫労働をどの程度節約したかという点のみを調べてもしかたがない。年間を通じての農業労働の中で，小麦生産がしめた比重を知らずに，小麦収穫の機械化だけを論じても無意味であろう。

表2，表3は，ニュー・ヨークとアイオワにおける年間労働日数を，月別および農作業別に示したものである。労働日数といっても，1日1項目とは限らず，「とうもろこしを植え，雑用をした」などという記入がある場合には2日分となる。午前と午後とを分けて書いていることもあるが，必ずしもそう正確には書いていないので，半日分の場合でも1日分としてある。もっとも1日に2種類の作業をすることは，あまり多くはない。さらに，日記では働いているのが，ベンジャミンだけなのか，弟達も一緒なのか，必ずしもはっきりしない。「われわれは，とうもろこしを植えた」とある場合も，単に「とうもろこしを植えた」というばあいもあり，後者の如く主語のないことの方が多いからである。これは日記である以上やむをえぬ点であろう。それ故，表に示されているのは，ベンジャミンの労働日数であって，ギュー農場全員のものではない。例えば表3のアイオワ1855年9月の場合，労働日数合計は6日間にすぎないが，これはベンジャミンが病気をしていたためである。また，ベンジャミンが働いていても，ギュー農場以外での仕事は含まれていない。例えば同じ1855年の7月の場合，購入したばかりの収穫機を使用して，他人の小麦を収穫した日数が15日にのぼっている。また同年10月にも隣人の乾草運搬や脱穀を5日間手伝っている。これらは労働の交換であって，別の機会には隣人がベンジャミンに労力を提供しているのであるが，ともあれ，表2，3に示されているのは，ベンジャミンのギュー農場における労働日数である。

次に，農作業の内容として，施肥，犂耕以外は作物の名が列挙してある。この際，作物に関する作業日数は，種まき以降，収穫，選別までを含むが，種まき以前の犂耕は含まれていない。例えばニュー・ヨーク時代，秋に小麦をまくための休作地を犂耕した場合，その日数は小麦の欄ではなく，犂耕の欄に含まれている。その理由は，犂耕に関する記入が簡単で，単に「犂耕した」とあり，何のためか不明な場合が多いからである。種まき以降は「とうもろこし畑を中耕除草した」とか，「オート麦を脱穀した」というように作物名がはっきりしているので，作物の欄に日数を記した。ただし，販売のための日数は含まれておらず，あくまでも農場内での作業日数に限られている。

他の作業としてまとめた中には，柵の修理や建設，冬場の仕事である伐木，運材，さらに雑用がある。雑用には，ベンジャミンが日記に「雑用（chores）」と記した場合のほか，農具の製作と修理，家屋の手入れ等が含まれている。もっとも，農具や家屋の修理をして「雑用」と書いた場合も多か

表2　年間労働日数（ニュー・ヨーク）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
農作業													
施肥				2									2
犂耕				13	9	10	6	8	5		4	1	56
とうもろこし					7	9	7		9	10	13		55
オート麦				5				12	10		1		28
小麦					3		3		3				9
じゃがいも					1		1		2	3			7
野菜					3								3
そば							1		1	5			7
牧草				2		5	6						13
りんご										4			4
小計	0	0	0	22	23	24	24	20	30	22	18	1	184
他の作業													
柵				3			2						5
雑用	3	2	1		2	2		1		3	2	6	22
伐木・運材	2	16	3	1	1			1	1		3	6	34
かえで糖			12										12
小計	5	18	16	4	3	2	2	2	1	3	5	12	73
合計	5	18	16	26	26	26	26	22	31	25	23	13	257

表3　年間労働日数（アイオワ）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
農作業													
犂耕				1	14				1	4			20
小麦	3		1	12	1		5	8		5			35
とうもろこし					8	9	1			1	5	1	25
牧草						1		3	4	2			10
果樹	1	6	6	4	7	6		1					31
小計	4	6	7	17	30	16	6	12	5	12	5	1	121
他の作業													
柵				6	2	2				1			11
生垣				2		2		1					5
雑用	6		6		2	4		3	1	5	4	4	35
伐木・運材	6	9	2								2	1	20
小計	12	9	8	8	4	8	0	4	1	6	6	5	71
合計	16	15	15	25	34	24	6	16	6	18	11	6	192

ったに違いない。ベンジャミンの日記には，家畜の世話をした記録がほとんどなく，せいぜい羊を洗い羊毛を刈る記入しかない。これは年間に2日か3日にすぎないので雑用に含ませておいた。た

だ，ニュー・ヨークでのかえで糖作りは3月のみではあるが12日間もかけているので，別個の項目とした。これら他の作業は，畑仕事ではないというだけで，農場における重要性は農作業とおなじである。労働者の雇用については後にふれるが，例えば1848年のギュー農場では，11月15日から，冬期の住込み労働者を雇っている。この事実は，主に冬場におこなわれる作業の重要性を物語っているであろう。

ところで，表2と表3は，ニュー・ヨーク時代とアイオワ時代を代表する年度を選んであるが，ニュー・ヨークに関しては，1848年4月から1849年3月までのものである。これは1848年3月中旬まで，ベンジャミンが寄宿制の学校へ行っていたためと，農作業の周期が前述の如く4月に始まるためである。アイオワの場合，果樹栽培がおこなわれ，接木などの作業は1月から始まるので，1855年1月から12月までをとってある。本来ならば，ニュー・ヨークの表は4月から始めるべきであるが，アイオワの表との比較を容易にするため，前後を入れ違えてあることを注意しておきたい。

さて，ニュー・ヨーク時代とアイオワ時代とを比較した場合，最初に目につく相違は年間労働日数の大きな差である。ニュー・ヨークにおいては年間257日，アイオワでは192日となっている。しかし，他の作業という部分は73日と71日でほぼ等しく，上記の差は農作業の日数の相違による。すなわち，アイオワにおいては農業労働は著しく軽減されたといえる。そこで，いかなる部分の農作業が減少したかが次の問題となる。ただ，農民の仕事には休みがない筈であるのに，上記の257日，あるいは192日という年間労働日数は，いささか少なすぎる印象を与えるので，まずその点について述べておく。

すでに記した如く，表2，3は，ベンジャミンがギュー農場でおこなった作業日数を，日記によって調べたものである。彼の日記は1848—49年と1855年に関しては，ほぼ完全ではあるが，それでも無記入の日が前者において52日，後者には41日ほど存在する。さらに「吹雪で寒い」とか「雨降り」というふうに天候のみを記入した日もある。もちろん，こうした日は何の作業もしなかった日とみなさざるを得ない。日曜日は教会へ行くので，通常は作業は休みであるし，他人の手伝いや，町へ農作物を販売に行った日は，労働日数には含まれない。さらにベンジャミンが病気の日もあるのであって，農場での作業が記録されぬ日が上の表に年間100日以上あっても，さして不思議ではないわけである。なお，農民の生活というと単調なものを想像し勝ちであるが，社交もしくは娯楽の機会がなかったと思うのは誤りである。教会とは別に，社交・娯楽の記録された日数は，1848—49年には44日，1855年には51日にのぼっている。(2)

表2，3にもどり，ニュー・ヨークとアイオワとの農作業の部分を比較検討しよう。アイオワにおける労働日数減少が著しいのは，農産物の種類が少ないことにもよる。オート麦，じゃがいも，

注(2)　社交や娯楽としては，討論会，sugar party, candy party, Valentine party, singing school，独立記念日の祝い等さまざまである。西部においても農民が数多くの社交機会に恵まれていたことについては，次を見よ。Gilbert C. Fite, *The Farmers' Frontier, 1865-1900* (New York, 1966), pp. 219-20.

野菜，そばが作られていないので，45日分の節約となっている。しかし，注目すべき点は，犂耕がニュー・ヨークの56日から，アイオワでは20日に減っていること，とうもろこしが55日から25日に減少していることであろう。まず犂耕について見ると，ニュー・ヨークでは4月から9月まで毎月おこなわれているのに対し，アイオワでは5月にほぼ集中している。これは，アイオワでの犂耕が，春小麦ととうもろこし作付の準備に限られているのに対し，ニュー・ヨークでは夏期休作地をも耕起しなければならないことによる。さらに，犂耕それ自体，プレーリーの土地の方が容易であったことも考慮すべきであり，アイオワでは能率も上ったものと思われる。これは，ニュー・ヨークで常に必要であった畑の石ころの除去が，アイオワでは不必要になったことからも推測される。[(3)] しかし，犂耕速度に関しては，ベンジャミンの日記からは判断の材料が得られない。そして，全体としての犂耕日数の減少は，能率向上よりは，夏期休作廃止によるところが大きいといってよい。

次に，とうもろこし生産に必要な労働日数の減少は，さまざまな要因がからんでいる。小麦の場合，収穫可能な面積が生産拡大の上限をなしたが，とうもろこしの場合には，中耕除草可能な面積が上限をなした。小麦と違い，とうもろこしは収穫期が限られていなかったからである。ニュー・ヨークのギュー農場においては，とうもろこしは5月に植えられ，6—7月に中耕除草がなされ，9月に収穫，10—11月には皮むきがおこなわれた。1855年のアイオワの場合，5月の植付け，6—7月の中耕除草までは同じであるが，収穫は10月から12月にかけておこなわれたので，表3には皮むき作業の日数は含まれていない。ニュー・ヨークとアイオワとを比較すると，植付けは7日間と8日間でほぼ同じ，中耕除草は16日間と10日間でアイオワがいく分少なく，収穫は9日間と7日間となっている。

当時アメリカを旅行し，農業について多くの観察を残したロバート・ラッセル（Robert Russell）は，とうもろこし栽培に関しても興味ある報告をしている。[(4)] すなわち，とうもろこしの生産においては西部の方が東部より有利であり，大人と子供1人ずつの労働力で，ニュー・ヨークでは10エーカー程度しか世話できないが，オハイオでは50エーカーが扱えるという。その理由は，ニュー・ヨークではフリント種（Flint）のとうもろこしが密に植えられるので，中耕除草に多くの手労働が必要だが，オハイオではデント種（Dent）が疎に植えられるので，人力ではなく，馬力で中耕除草が可能なためであるという。ギュー農場の場合，何種のとうもろこしが植えられていたかは不明であるが，ニュー・ヨーク時代には鍬（hoe）による作業が多く，アイオワに移ってからは犂（plough）での作業が多い。したがって，アイオワにおいては人力による中耕除草が減って畜力が利用され，その結果，能率が向上したものと思われる。

なお，ラッセルは，オハイオのとうもろこし栽培の特色として，犂による中耕が一方向のみならず，それと直角に交差する方向にもおこなわれることを述べ，とうもろこしが，碁盤縞（check rows）に植えられていると記している。[(5)] これに対し，ニュー・ヨークでは中耕は一方向にしかなされず，除草の効果が少ないわけである。ベンジャミンの日記からは，アイオワで碁盤縞にとうもろこしを植えたかどうかは解らない。しかし，ニュー・ヨークの場合，とうもろこしを植える準備として，一方向に区画したという記入があり，碁盤縞でなかったことは確かである（1848年5月11日）。東部と西部とでの植付方法の相違は，単に品種の差によるだけではなく，利用可能な土地の広さや，作付規模の差によるものと考えられる。ベンジャミンの場合，植付作業日数から見て，アイオワにおいて生産規模を著しく拡大したとは思われない。しかし，ニュー・ヨーク時代には見当らなかった，とうもろこし用の犂（corn plough）などという道具を使っている点からして，植付，中耕方法に変化があったことは明らかである（1853年7月7日の項）。

ところで，とうもろこし生産における夏期の中耕除草の重要性は否定し得ないとしても，必要労働日数から見ると，収穫後の皮むきが大きな比重をしめている。ニュー・ヨークの場合，中耕除草は16日間，皮むきは23日間である。アイオワについては，前記の如く皮むき作業の日数が含まれていない。それ故，表3における日数減少は見かけだけのこととともいえる。もっとも，ニュー・ヨークにおいては，とうもろこし皮むきのため，ブッシェルあたり3セントという賃金で労働者を雇っている（1848年11月15日）。アイオワの場合，他の年度の例を見ても，皮むきの集まりの記録（1853年11月23日）はあっても，労働者を雇った様子はない。こうした相違は，ニュー・ヨークでは，とうもろこしが売却されたのに対し，アイオワでは売却されないという事情と無関係ではあるまい。

さて，ニュー・ヨークとアイオワとを比較して，後者における労働日数が増加しているのは，小麦と果樹である。ただし，果樹の場合，ニュー・ヨークでは，りんごの収穫のみであり，アイオワでは苗木植えや接木の作業なので，比較にならない。それ故，小麦について検討しよう。ニュー・ヨークの場合，小麦生産の前提ともいうべき夏期休作地の犂耕日数を含まぬことは，前記の通りである。しかし，播種，収穫，脱穀に関して，9日と35日という相違は，アイオワにおける小麦の重要性を明らかに示している。小麦生産量は，ニュー・ヨークでは約200ブッシェル（ただし1849年），アイオワでは840ブッシェル（1855年）という記録がある。アイオワでの生産量は，ほぼ4倍になっており，労働日数の増加も当然といえよう。しかも，アイオワでは小麦収穫は機械化されているのであって，ニュー・ヨーク時代の如く人手で収穫していたならば，日数はもっと多くなったであろう。

次に月別労働日数を見てみよう。ニュー・ヨークにおいては，農繁期と農閑期がはっきりしていて，4月から10月までの農繁期には農作業以外の仕事は，ほとんどおこなわれない。11月に入って農作業がいく分ひまになると他の作業日数が増えはじめ，12月から3月までの農閑期には，もっば

注（3） 例えば，*Diary*, Aug. 23, 24, 1850; Jun. 9-13, 1851.
（4） Robert Russell, *North America: Its Agriculture and Climate* (Edinburgh, 1857), pp. 31, 81-2.
注（5） Russell, p. 82.

ら他の作業がおこなわれる。農繁期の月間作業日数は，大体25，6日であって，日曜以外は仕事に忙しいが，農閑期になると平均15日程度ということになる。アイオワの場合には，ニュー・ヨークに比較して，いささかバランスがとれていない印象を受ける。一応は4月から10月までを農繁期と考えてよいが，とくに忙しいのは4月から6月までで，しかも，これらの月にも他の作業がいろいろおこなわれている。こうした状態になったのは，生産物が春小麦ととうもろこしであり，7月の小麦収穫が機械化されていること，果樹の手入れが2月から6月にかけておこなわれていること，犂耕が5月にほぼ集中していること等によるものである。なお，ニュー・ヨークでは6—7月におこなわれる乾草作りが，アイオワで8—10月と後へずれていることは，穀物収穫と乾草作りという最も忙しい作業が重ならぬ点で好都合であった。これは自然的条件によるものであるが，ベンジャミンがアイオワ時代，自分の小麦を収穫した後に他人の小麦収穫を手伝えたのは，乾草作りが重ならぬためである。

前節で，ニュー・ヨーク時代のギュー農場においては，あらゆる面で変化が生じ難いことを述べた。表2に示された月別の労働力配分は，まさに変化を困難たらしめている重要な要因であった。年間の労働が月毎にバランスをとって配分されている以上，一部分のみの変更は不可能であり当然他にも影響を与えざるを得ない。たとえ収穫が機械化され，小麦やオート麦の収穫日数が短縮されたとしても，とりあえず暇になった時間は無駄になってしまう。しかも，収穫機械化により，生産を拡大しようとすれば，犂耕や播種に影響し，春の仕事が著しく増加してしまう。すなわち，1年間の仕事のうちで，一部分だけ能率が上っても無意味であり，すべてにおいて同時に能率が上る必要があったのである。

アイオワの場合，移住後数年しかたっていないこと，最初はベンジャミンとジョーの2人で働いていたのが，ニュー・ヨークから家族がやってきて労働力が増えたこと，やがてジョーが結婚すること等々の理由で，ギュー農場における労働力配分は，ニュー・ヨーク時代のような均衡には達していない。表3がバランスを欠いた感じを与えるのは，前述の如く生産物による事情もあるが，このように農場における労働力供給が安定しないためでもあろう。しかし，夏期休作地犂耕の不必要，とうもろこし中耕除草労働の節約，乾草作りの季節が弾力的なこと等が，労働力配分の上に余裕を生んでいることも確かである。かかる余裕の存在が，変化を容易にし，小麦生産の増大や特殊化を可能ならしめた。

アイオワのギュー農場において，アトキンズ収穫機の導入が小麦収穫の能率を高め，小麦生産の拡大をもたらしたことは事実である。しかし，以上のように考えてくると，収穫機導入によって生産拡大が可能になるという議論は正しいとはいえない。いささか逆説めくが，ギュー農場の場合を見ると，小麦生産の拡大が可能であって，はじめて収穫機導入が実現され得るという方が正しい。個々の作物について見る限り，小麦については収穫労働，とうもろこしについては中耕除草労働が

生産拡大の隘路になる。しかし，この隘路が取り除かれたとしても，それが原因となって新たな隘路が発生する可能性は十分にある。農民の農業機械購入熱に対しては，当時からさまざまな批判があり，とくに彼等が無理な借金をして機械を購入することへの批判が多かった。かかる批判は，機械購入が必ずしも農場経営に利益をもたらすとはいえないという認識にもとづくものであろう。何故利益をもたらさないかという点については，農場規模，経営能力，機械の性能等々いろいろな原因が考えられるが，労働力配分上の無理ということも考慮すべきであろう。生産の場であると同時に生活の場でもある農場の有機性を無視して農業機械を導入したとしても，利益が増大するとは限らないのである。

ところで，農場における労働力配分を論ずるにあたって，労働交換および雇用労働についてもふれる必要があろう。以下この点について述べる。ベンジャミンの日記には，ニュー・ヨーク時代，アイオワ時代を通じて，隣人との労働交換や，雇用労働についての記入がしばしば出てくる。もっとも，労働の交換は，ニュー・ヨーク時代には，年間にせいぜい10回程度であり，アイオワ時代における20回以上に比べると半分以下である。雇用労働には，半日とか1日とかいう短期のものと長期のものとがある。ニュー・ヨーク時代には，羊の毛を刈ったり，乾草作りや収穫期に，短期の雇用を延べ日数にして10日以内，冬期にはアイルランド人を1ヵ月ほど長期雇用している。アイオワでは，最初の内は雇用労働を利用した形跡はないが，1855年になって，ニュー・ヨーク州グリーン郡から来たウィリアム・ビーデル（William Bedell）を4月9日から5ヵ月間，88ドルで雇用している。

ニュー・ヨーク時代における労働交換は，比較的少数の限られた家族とのみおこなっていた模様であり，レイク（Lake），メイコウマー（Macomber），ハイト（Height），パウンド（Pound）などという名前がよく出てくる。仕事の内容としては脱穀が比較的多いが，これは収穫などと違って，いく分時間的に余裕のある作業だからであろう。誰もが忙しい乾草作りや収穫のためには，雇用労働に頼るより仕方がないようである。例えば1850年には，フランス（France），ジョンスン（Johnson），ウィリス（Willis）等という者が収穫のために雇われている。ところでアイオワ時代になると，労働を交換する範囲が拡がってくる。これは家屋の建設など，多数の協力が必要な作業が多いからかもしれない。1853年6月に，ベンジャミンが家を建てた時には，17名の者が手伝いに来ている。また仕事の内容も，犂耕，播種，収穫，運搬とすべてにわたっているが，これは労働者の雇用が困難であったためと思われる。

以上の点から見て，労働交換の有する意義が，ニュー・ヨークよりもアイオワで大きかったことは確かであろう。しかし，このような形で得られる労働が，ギュー農場における年間の作業配分の中で，どのような位置をしめていたかは問題である。相互の必要と好意によって利用できる労働力を，常に確保し得る保証はない。とくに，交換する範囲が広ければ広いほど，不確実さが増大す

る。もちろん，範囲が狭くては，いざという時に間に合わないので，多数の人々と労働を交換するという面もあるが，少なくとも最初から交換労働の利用を予定に組み入れることは危険であったろう。ベンジャミンが生産物を特殊化した1855年に，収穫機を導入し，農繁期に労働者を長期雇用したのは，上記の危険を避けたものとも解釈できる。

労働者の長期雇用という面で注目すべきことは，ニュー・ヨークの場合，それが冬期におこなわれている点である。1848年には11月15日からであるが，1850年には12月7日になってから雇い入れており，農場での仕事はもっぱら伐木や運材に限られている。アイオワの場合には4月から9月までの雇用であるが，ニュー・ヨークでは，肝心の農繁期は何人かを臨時に雇用するだけですまし，農閑期に長期雇用をおこなっている。この事実は，単に，ニュー・ヨークとアイオワとで，ギュー農場における年間の労働力配分が変化したことのみを示しているのではない。むしろ，農場経営のあり方が変化していることをも示唆しているようである。それ故，ここで節を改め，経営の変化に考察を移すこととしたい。

Ⅳ　西部移住と農場経営

ベンジャミン・ギューは，若年ながら経営的手腕にも恵まれた農民であった。彼が東部の農場を売却して西部へ移住したのは，ニュー・ヨークでの農場経営に行き詰まったためでないことは，すでに述べた通りである。しかし，ニュー・ヨーク時代に，近隣の農民で破産する者のあったことは，彼の日記からも解る(1850年6月7日)。これまで述べてきたような農場の有機性や労働力配分についての考慮を欠いた行動が，作物転換であれ機械購入であれ，農場経営の失敗をもたらし得ることは十分に考えられる。ベンジャミンの場合，ニュー・ヨーク時代の農作物販売における抜かりなさや，アイオワにおける農場購入に際しての慎重さは，彼が経営の才を有していたことを物語る。ただし，彼の日記には，毎年の収支計算などは記録されていないので，農場経営による利益は一切不明である。以下，農作物の販売等に関する記入によって，ギュー農場の経営を眺めてみよう。

ニュー・ヨーク時代のギュー農場の生産物が多種多様であったこと，地理的にいって販売機会に恵まれていたことは，すでに記した。農場における生産物のうち，毎年一番早く販売されるのは羊毛であり，通常6月から7月頃に売却される。販売量は100ポンドから200ポンド程度であり，1848年には約200ポンド売却して51ドルの収入を得た。羊毛の次には小麦が販売される。小麦収穫は7月中旬であるが，脱穀，選別の終る8月から売却が始まり，ほぼ10月には売却が終了する。1850年の場合を見ると8月3日に脱穀が終り，同月8日までに選別も終了している。売却は8月6日からおこなわれ，7日，9日，14日，15日，16日，17日，18日と連日のように近くの町で売却している。売却量や収入は不明であるが，9日には従来からの掛勘定100ドルを清算し，17日には同

様に49ドルを支払っているので，小麦売却収入によって，清算をしたり，新しい買物をしたりすることが解る。オート麦は9月から11月にかけて売却されるが，同じ頃に家畜の売却もおこなわれている。(6)

ギュー農場では羊毛のみならず，羊の売却もおこなわれた。羊の場合には，ベンジャミンが売りに行くのではなく，買手がやって来ることが多い。1849年について見れば，9月3日にはマイロン・ノートン(Myron Norton)が20頭を1頭1ドル50セントで購入し，2週間後に引取りに来た。また9月10日にはトラスク (Mr. Trask) という者が，54頭を1頭1ドルで購入し，後に引取りに来ることになった。この場合には飼育費として，2週間までは1頭につき1週2セント，それ以上は3セント，トラスクが支払う契約であった。もっとも同年10月31日には，ロレンゾ・ハサウェイ (Lorenzo Hathaway) と取引し，彼に25頭の豚を渡し，それと引き替えに25頭のサクソン・メリノ種の羊を入手している。また翌1850年の10月21日にも，ハサウェイから54頭の羊を購入し，かわりに小牛を売却している。豚は生きたまま売ることも，屠殺して豚肉を売ることもあった。

さらに冬に入ると材木を切り出して収入を得ることができる。木材は個人の店へ売ることもあるが，道路会社へ納める場合もある。道路会社とは，当時ニュー・ヨークに多かった有料の板張道路 (plank road) を経営する会社である。例えば1850年1月1日の日記には，値段の折り合いがつかず道路会社と契約できなかったとあるが，同年12月14日には，マセドン・ブリストル板張道路会社 (Macedon and Bristol Plank Road Company) に8000フィート分の板材を納める契約を結んでいる。また，1851年1月に馬そりを40ドルで購入した際，その内10ドル分は木材で支払い，残額は同年11月に支払うとしている。

なお，3月頃になってライ麦を売った年もあるが，大体1月から5月頃までは販売の記録は少ない。したがって，この間は収入がないわけで，買物をした場合には掛にするか，もしくは手形で支払うようである。例えば1848年4月17日に，フェトルプレイス (S. W. Phettleplace) が来て勘定帳を見たところ，35ドルたまっていたとか，1849年4月6日に役畜 (83ドル) を買い，6ヵ月後に支払うことにしたとかいう記入がある。農民の間で手形が盛んに流通していたことは，先にもふれた通りである。ニュー・ヨークの農場を売却した1851年には，8月中に小麦ととうもろこしを売却してしまい，8月23日には家財道具の売立てをおこなった。そして，9月に入って，ニュー・ヨーク市へ出発する前に，前記フェトルプレイス，パーディー (Purdy)，スミス (Smith)，クロッカー (Crocker)，ビックフォード(Bickford)，ホフマン(Hoffman)，ヒンクリー(Hinckly)，アプトン (Upton) と貸借関係を清算している。最後のアプトンは農場の買手であるが，他は商人もしくは農民である。

注(6)　小麦等の売却は，主にメンドン・ロックスがパルマイラでおこなわれた。買物もほぼ同じであるが，行商人がまわって来ることもあった。行商人は，ベンジャミンの家に泊る場合もあったようである。例えば，*Diary*, Sept. 4, 1847; Oct. 1, 1847. さらに，ベンジャミンが，カナンダイガへじゃがいも等を行商にいったという例もある。*Diary*, Aug. 10, 1847.

ここで，家財道具の売立てについて一寸ふれておこう。今日でもニュー・ヨークの農村地域では，遠方へ引越してゆく家族が，家具敷物から食器類に至るまでを処分してゆく売立て光景が見られるが，ベンジャミンの日記にも，しばしば売立て（auction, vendue）が出てくる。例えば1848年3月28日，彼はキャットケイマー（Catkamere）の売立てに行き，一日中をそこで過した。「自分は何も買わなかったが，いつも通り，品物はとても高く売れた」と彼は書いている。別の機会に彼は馬具や農具を購入しているが，売立てでは家畜が処分されることもあった。ベンジャミンが一日中を過したという記入からもうかがわれるように，売立ては一種の社交娯楽の機会でもあった。人々は家の中を歩きまわり，戸棚や箪笥の奥をのぞきこみ，ベッドや安楽椅子の具合をためし，食器やその他の細々した品物を手にとってみたりした。そして，売立人の冗談や買い手とのかけひきが，人々の笑いをさそうのであった。(7)

ベンジャミンの家では，1851年8月18日から売立ての知らせを各所に掲示し，同月23日に競売をおこなった。彼の場合，自分は都会へ出るつもりであったし，家族は東部の親類のところへ落着くことになっていたから，家財道具の整理が必要であったことはいうまでもない。しかし，最初から西部で農場を取得するつもりであったとしても，競売の必要は生じたに相違ない。当時の旅行記には，大きな荷物を持っている西部への移住者の話が出てくるが，家具などは移住前に処分しなければならなかったものと思われる。船や馬車や汽車を乗り継いでの旅に，かさのはる荷物は禁物であった。

さて，アイオワで農場を取得したベンジャミンは，農具，家財道具等一切を購入して生産を始める。彼の農場は，カリフォルニアへの移住路に面していたらしく，1852年3月から5月にかけて，カリフォルニアへ向う馬車が毎日のように10台から20台も通過したことが記録されている。5月6日には，男3人，婦人2人，子供1人，馬6頭を連れたカリフォルニア移住者が，ギューの家に泊っている。西部農民にとって，移住者が市場を提供するという話は良くあるし，ベンジャミンの場合にも以前からここで農業をしていたのであれば，生産物を売ることが可能であったろう。しかし，この年は自分達も移住したばかりであったし，その後もカリフォルニア移住者へ農産物を売却した記録はない。

1852年度のギュー農場の生産物は，オート麦500ブッシェル，とうもろこし200ブッシェル，小麦120ブッシェル，そば20ブッシェル，乾草25トンであった。農場には馬2頭，牛1頭，豚1頭，羊275頭が飼われていた。なお同年8月に，ベンジャミンとジョーは，イリノイへ行って，羊を800頭，1頭あたり1ドル40セントで購入したとある。同年末には275頭しか飼育していないから，残りは売却したものであろう。移住にともなう出費が多かったので，このような方法で，収入を得

注(7) 売立てについては，Ulysses P. Hedrick, *A History of Agriculture in the State of New York* (Albany, 1933), p. 212. ベンジャミンは年に数回は売立てにいって，農具等を購入している。

ることを考えたのであろうが，アイオワで1頭がいくらに売れたのかは不明である。

残念なことに，ベンジャミンの日記には，年々の生産高についての詳しい記録がないので，上記を他の年度を比較するわけにゆかない。ただ，アイオワに移住したベンジャミンが，当初は，ニュー・ヨーク時代と同様な生産のパターンを保とうとしたことは明らかであろう。前に述べたように，翌1853年には，ニュー・ヨーク時代に生産していた農作物をすべて作っているし，ティプトンの町で，りんごの苗木130本を購入している（4月15日）。しかし，いざ販売ということになると，ニュー・ヨークとは事情が異っていた。さまざまな農作物のうちで，販売の記録があるのは，家畜は別として，小麦だけである。

ニュー・ヨーク時代には，小麦は8月から10月にかけて売却がすんでしまうと記した。アイオワへ移ってからは，翌年に入っても小麦売却の記録がある。例えば1853年1月3日にはダヴェンポートへ小麦を売りにいっているし，同月にあと2回ほど販売している。1855年にいたっては，前年に収穫した小麦を，6月に入っても売っている。同年は小麦価格が上昇した年であるが，1月にはブッシェルあたり95セントで46ブッシェル，3月には1ドル10セントで35ブッシェル，5月には1ドル35セントで36ブッシェル，6月4日には最後の50ブッシェルを1ドル25セントで売却することができた。これらは，いずれもダヴェンポートへ運搬して売却した分であるが，3月29日と4月3日にはポール・バウマン（Paul Boughman）という者が農場へ来て，計40ブッシェルを，ブッシェル1ドルで買い入れている。

小麦売却の時期をのばしている理由は，もちろん，おそくなる程，値段が上るためであろう。しかし，小麦以外に販売し得る農作物がないこと，東部ほど信用売買が自由におこなえなかったことも影響している。秋から冬にかけて家畜の売買がおこなわれる点は，ニュー・ヨークと同様であり，1853年10月17日には羊50頭を120ドルで売却し，翌18日連畜2組（牛4頭）を同じ120ドルで購入している。また同年11月19日には羊数頭と子馬を交換している。しかし，現金収入がない時期の買物をすべて掛にしておくかといえば，必ずしもそうではない。1854年4月に苗木屋で，オセイジ・オレンジの種子や各種苗木を合計35ドルほど購入しているが，これは現金払いであるし，1855年に購入した収穫機すら現金で買っている。収穫機は180ドルであったが，6月23日に10ドル手付けを支払い，翌日数名のところをまわって80ドル集め，さらにベンジャミンの婚約者の父親から90ドル借金して，7月2日に全額を支払い，機械を受取っている。家畜の購入にあたって手形で支払っている例もあるし(1853年10月22日)，手形を取引した記録（1855年3月16日，9月8日）もあるが，農民間における信用授受の発達の度合いは，ニュー・ヨークより低かったに違いない。

かかる状況の下では，唯一の換金作物たる小麦の重要性は非常に大きい。1852年に120ブッシェルしか生産されなかった小麦が，1855年には840ブッシェルに増大しているのは，こうした点から見て当然ともいえる。ニュー・ヨーク時代とアイオワ時代とを比較してみると，所得機会という点

で後者は著しい制限を受けているのである。ところで，こうした経済的環境は，農場経営のあり方に大きな影響を与えている。ニュー・ヨークにおけるギュー農場が，いわば一般農業という形をとり，生産の特殊化をおこなわなかったこと，実際問題として特殊化が不可能であったことは，すでに述べた。しかし，ニュー・ヨークにおいては，特殊化することが果して有利か否かも疑問であった。あらゆる生産物に対して販売機会が存在する以上，価格の変化や病虫害を考慮すれば，単一の作物に努力を集中することは危険の大きすぎる賭けであった。ギュー農場のあったジェネシイ地方は，ニュー・ヨークにおける小麦生産の中心地ではあったが，小麦の持つ意味は，アイオワとは違っていた。(8)

さらに，ニュー・ヨークにおいては，木材の販売など，農業以外の収入の道があったことが重要である。農業からの収入を増加するためには，生産物を利益の大きなものに変更するか，生産量を増大する必要がある。ニュー・ヨークのギュー農場では，第一の方法は採用できなかった。次に生産量の増大が考えられるが，そのためには耕地面積の拡大と労働雇用の増加が必要となる。開墾はギュー農場でもおこなわれていたが，その速度は遅々たるものである。したがって開墾済みの土地を購入することとなるが，地価はエーカーあたり30ドルから40ドルもする。借地料は同様に高く，ベンジャミンの日記にはエーカーあたり年6ドル（1848年5月18日）という例が示されている。さらに，たとえ土地を購入する資金があったとしても，労働力の不足を雇用労働によっておぎなわねばならない。このように考えてくると，農業所得の増大には障害が多すぎ，いっそ農業以外からの収入を増加させる方が容易である。とくに農閑期の仕事であれば，家族労働力にも余裕があり，労働者を雇用することも農繁期ほど困難ではない。(9)

つまりニュー・ヨーク時代のギュー農場にあっては，農業生産のみならず農場経営そのものが多角的になる傾向があったと思われる。経営拡大は，農業生産そのものではなく副業によっておこなう道がとられたわけであり，長期の雇用労働が冬場になされたのも，このためであろう。一方，アイオワにおいては，地価が低いので農場拡大が容易であるし，労働力の不足は機械化によっておぎなうことが可能である。しかも，生産物の変更や特殊化に対する障害も少ない。逆に，農業以外の収入の道といえば，出稼ぎのような形をとらざるを得ない。したがって，農場経営の拡大は，まさに農業生産の拡大および特殊化という道によっておこなわれる。そして，機械化によってはおきかえられぬ部分の労働力不足は，労働交換なり雇用労働なりに頼ることになる。すでに示した如く，ニュー・ヨークとアイオワを比較すると，年間労働日数はアイオワの方が少ないし，労働力配分の上でも余裕がある。にもかかわらず，長期雇用労働者が，ほかならぬ農繁期に利用されていること

注（8） Smith, "Middle Range Farming," を参照。スミスの論文はオンタリオ郡の東隣りにあるセネカ郡の農民の日記によるものであるが，その農民（Henry K. Dey）は南北戦争期においても一般農業に従事していた。

（9） 岡田「ニュー・ヨーク農業の変遷」は，いく分東側の酪農地帯についての例であるが，そこでは樽の製造が副業としておこなわれ，経営の重心が次第に副業の方へ傾いていった。

は，アイオワ時代のギュー農場が，農業生産に主力をおいていた証拠であろう。

本稿でくり返し述べてきたように，商業的農業という点では，ニュー・ヨーク時代もアイオワ時代も変りはない。ベンジャミン・ギューの農場経営の手腕は，経験年数が増えたという点で，アイオワ時代の方が上かもしれないが，日記からは確たる証拠はつかめない。農場における労働力にしても，主たる働き手の数という点では同じであるし，農場規模にしても著しい差があったとは考えられない。しかし，ニュー・ヨークのギュー農場と，アイオワのギュー農場は，明らかに異なる性格を有していた。前者における農業生産は，特殊化を拒み，機械化を拒み，農場経営者の意志に従うことを拒んでいた。若いベンジャミンが農場を売却して，都会へ出ることを望んだのも無理からぬ話であったろう。ニュー・ヨークのギュー農場に変化を生じさせるためには，よほど急激な労働力および資金調達力の変化が必要だったのであり，つまるところ所有者の変化が必要であった。ベンジャミンが所有し続けている限り，一家の生活に破綻をもたらす恐れのない変化は，副業の拡大という方向しかあり得なかった。(10)

アイオワにおけるギュー農場は，農業生産の特殊化，機械化，拡大という点で，いわばベンジャミンの思うままにすることが可能であった。しかも，東部の農場を売却して西部で農場を取得したので，その価格差による利益が，ベンジャミンの資力を豊かなものとしていた。もっとも，アイオワ移住後のベンジャミンが，ニュー・ヨーク時代よりぜいたくな暮しをしていた様子はない。収穫機の購入にあたっても借金をしなければならなかったことは，すでに記した通りである。しかし，西部移住によって，いわば自動的にもたらされた経済力の増大が，農場経営者としてのベンジャミンに行動の幅，あるいは余裕を与えたことは確かであろう。それが，ニュー・ヨーク時代には不可能であった経営上の冒険，すなわち大胆な作物の変更や生産拡大を可能ならしめる条件となったことは否定できない。かくして，西部への移住は，ベンジャミンをもギュー農場をも変化せしめたのであった。

V 結　び

ニュー・ヨークで発行されていた『ワーキング・ファーマー』誌（*Working Farmer*）の編集者は，1861年に次のように述べている。「作物の選択にあたって，農民は……著しく分別を欠いている。市場にも近く，高く売れる作物によく適している地域で，価格の低い作物ばかりを代々作り続けて

注(10) 急激な変化として，所有者の変化以外の場合も考えられる。例えば南北戦争によって，一家の主人が兵隊にとられるとか，農産物価格が急激に上昇するとかいう場合である。地力の低下や西部の競争の如く，比較的緩慢な刺激では，農業生産の型を変化させにくい。その点では，著しく大きな病虫害などの方が，生産の型を変化せしめる上で有効ともいえるであろう。但し，同じ農場に留って生産の型を変化させるよりも，西部へ移住する途を選んだ農民が多かった。Gates, *Farmer's Age*, pp. 163-4 を参照せよ。

いる例が，しばしば見うけられる。ニュー・ヨーク市から10マイルと離れていない場所で，とうもろこし，オート麦，乾草，小麦，ライ麦等を作っている農家が沢山あるが，……その土地の価値の利息分だけで，西部の農場が購入できるほどの場所である。この付近には，農場価値の2パーセントの利益も上げていない農民が多数存在するが，その中で野菜生産者は大いに利益を上げているのである。[(11)]」

たしかに，この編集者の意見はもっともである。しかし，農民が作物や技術をなかなか変更しなかったのは，単に彼等が分別を欠いていたり，保守的なためではない。ベンジャミンの例が示しているように，農場経営者の意志に関わりなく，変化が極めて困難な場合も多かったのである。しかも，それによって所得水準が低くおさえられているとすれば，経営上の冒険はますます実行しにくくなる。まさに農民の分別が，変化を拒むことになろう。本稿においては，ニュー・ヨーク時代のギュー農場の停滞的状況を，資本不足という面からは考察しなかった。これは，そうした面についての材料がベンジャミンの日記からは得られなかったことと，日記からうかがう限りでは，ギュー農場がそれほど貧しい感じを受けないことによる。しかしながら，農業生産からの所得増加が困難であった以上，資本不足ということは当然考えられる。そして，それが変化を妨げる一要因となっていたことも，疑い得ぬところであろう。

ベンジャミンは，1847年から1848年にかけての冬の間，カナンダイガ・アカデミー (Canandaigua Academy) という学校に寄宿して通っていた。ある日のバイブル・クラスで，校長のハウ氏 (Mr. Howe) は，次のような講義をした。「(君達の) 大部分は今や世の中に出てゆこうと準備をしているところであり，やがて現在の指導者にとってかわることを求められる。……したがって (君達は) 重大な責任を自覚すべきである。……忍耐と正直とによって，(君達は) 社会におけるいかなる地位にも着くことができる云々」(1848年3月15日)。このような教育を受けた若者にとって，自己の創意を発揮し得ぬ農場経営に従事することは，極めて不満であったに違いない。ベンジャミンが都会生活にあこがれ，カリフォルニア移住を夢み，ついには西部へ移住したのも当然であった。[(12)]

19世紀中葉のアイオワは，ニュー・ヨークに比べれば，はるかに未開の土地であった。郵便はなかなか届かなかったし，第一便利な場所に郵便局がなかった。道路も十分でなく，会合を開いて道路計画を決め，建設を請願する必要があった。後にニュー・ヨークから移住してきた弟のための学校探しも，骨の折れる仕事だった。ここで当時の東部と西部との対照を示すため，農民の最大の楽しみであった秋の共進会の様子を，ベンジャミンの日記によって見よう。1849年9月11日，彼は友人と，ニュー・ヨークのシラキュース (Syracuse) で開かれた共進会に出かけた。カナンダイガからの汽車は満員であり，シラキュースの駅に着くと，会場までの馬車の客引きが大勢いた。入場料を

注(11) Danhof, *Change in Agriculture*, pp. 148-9 に引用されている。
(12) 若者の間で農業が不人気であったことについては，岡田「ニュー・ヨーク農業の変遷」165頁を見よ。

払って会場に入ると，機械館にはさまざまの農機具が，工業館には毛布から馬車までが展示され，酪農館にはバタやチーズの優秀な見本が陳列されていた。中でも園芸館はすばらしく，目もくらむような花々の美しさは言葉にあらわせぬほどであった。家畜展示場には象ほどもある牡牛がおり，さらに見物客の中にはヘンリー・クレイ (Henry Clay) の姿さえあった。こうした共進会に比べ，アイオワのそれはどうであったか。1855年9月13日，ダヴェンポートの共進会を見物に行ったベンジャミンは，「みすぼらしく，わずかな展示しかなかった」とのみ記している。

しかし，ニュー・ヨーク農業の黄金時代は過ぎ去ろうとしていた。一方，アイオワはこれからの土地であった。1854年2月22日，ベンジャミンは，アイオワへの鉄道開通をダヴェンポートまで見物に行った。旗や花輪に飾られ，号砲と人々の歓声に迎えられた第1号の汽車は，アイオワ農業の黄金時代の開幕を象徴するものであったといえよう。当日，ホテルは超満員であり，ベンジャミン達は客室の床に寝なければならなかったが，昼間のつかれと将来への期待とが彼等を心地良い眠りにさそったのであった。

（経済学部助教授）